

平成州紙



おりおりの記

現在まで出張なども含めると多くの国を訪れる機会があったが、私にとって一番印象深い国はトルコである。中東やシルクロードに興味があり、『遠くて近い国トルコ』（大島直政著）という本にも触発され、学生最後の夏休みを利用しての初めての渡航先にトルコを選んだ。

早朝にイスタンブールに到着し、市内へ向かうタクシーの中から見たボスポラス海峡の朝焼けの美しさは今でも鮮明に覚えている。その後、当初予定していた帰国日を大幅に延期し、結局40日近くトルコに滞在することとなったが、その最大の理由は、トルコの人びとの交流である。

トルコはよく親日国と言われるが、正に身を持ってその体験をした。バックパックを背負い、バスを利用しての貧乏旅行であったが、行く先々で多くの人の親切、もてなしに接する機会を得た。バスの中で知り合った大学生に自宅に招かれ手料理を振る舞われたり、街中で地図を広げていたところ、小学校高学年と思しき少年達が行く先まで同行してくれた上、当方の入場料を支払い、案内役まで務めてくれた。私が恐縮をすると、「遠方からの大事な友人をもてなすのは我々トルコ人の礼儀」と事もなげに言われ、驚いた。街中でチャイ（トルコの紅茶）をご馳走になるのは日常茶飯事だった。

トルコの思い出

東京証券取引所
代表取締役社長

宮原 幸一郎

始めは、トルコ人は外国人旅行者には皆親切なのかと思っていたが、彼らと接するうちに特に日本人に好意を抱き、日本に大変関心を持っ



ていることが分かった。日本についての知識、情報を競い合うように披露し、中には「日本人とトルコ人は元は同じ民族で西に向かったのがトルコ人になり、東に行ったのが日本人になった」と話す人もいた。また、ある時は空手の実演を求められ、気が付くと私の周りに20人近いトルコの人たちの輪が出来ていたこともあった。

トルコは、数々の遺跡を始めとして多くの観光資源に恵まれており、また世界三大料理の一つと言われるトルコ料理もお薦めだが、私にとってはやはりトルコの人びとこそが最大の魅力である。現在のトルコはG20の参加国でもあり、成長著しい新興経済国の一つである。一方で昨今の同国を取り巻く政治社会情勢についてはやや心配なところもあり、再び訪れる機会を見出せるよう早く平穏を取り戻してほしいと切に願っている。